

山田堰記念館—井とめぐる—

山田堰	合同堰	記念館	1230059	河野 珠希
土木施設	井	舟運	指導教員	渡辺 菊眞

1.背景

堰は今も昔も生活に欠かせない重要な土木施設である。高知県香美市土佐山田町物部川には 1665 年から約 300 年間にわたって使われた山田堰があった。この山田堰と舟運として活用された用水路は水害の減少と農業、商工業の発展に大きく役立った。1973 年に山田堰上流に近代的な合同堰が新たにつくられ、山田堰はその役目を引き渡した。以降、周囲のかがい排水事業が行われた後も、合同堰と用水路は地域住民の生活を支え続けている。

現在の山田堰跡は一部が残っており、そばに看板や石碑が置かれている。しかし、はじめて見る人は山田堰が何なのか、合同堰になったことで何が変わったのかわかりづらく、実感もわからない。そのため、山田堰・合同堰が何なのか、それにより何が変わったのかについて伝える場とそれらを実感する体験型の空間が必要であると考え。



図 1.山田堰跡



図 2.周囲の石碑と看板

2.目的

本設計では山田堰記念館を設計することが目的である。ここでいう山田堰とは、山田堰、合同堰、それに伴う井を含む全体を指し、記念館は資料展示と体験空間からなる施設として設計する。

3.設計指針

山田堰記念館の設計指針は以下とする。

- I.山田堰、合同堰(新旧山田堰)の概要について知る場とする
- II.堰ができたことによる空間的な変化を知る場とする
- III.上記を実感するための体験的な場とする

4.設計

4-1.設計の手順

山田堰記念館の設計手順は以下とする。

- I.山田堰、合同堰を知るための 2 つの拠点施設を計画する

II.資料展示と空間展示を組み込む

III.2 拠点を井と共にめぐる場を計画する

4-2.設計の内容

I.敷地

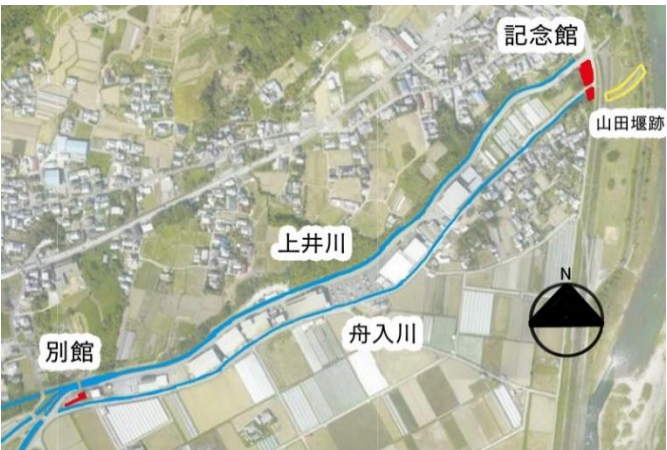


図 3.全体の配置図

1) 出典：国土地理院地図に対象敷地などを追記

拠点施設は山田堰・取水口跡周辺と、山田分水口水門の近くの 2 か所とする。

取水口跡周辺(以後「記念館」と表記)は現在の山田堰跡と取水口跡がどちらも見える場所であり、合同堰以後の道路との高低差と 2 つの井を感じる場所でもある。資料展示と空間展示からなる。

山田分水口近く(以後「別館」と表記)は用水路の変化が一番わかる場所であり、土地利用の変化の境目でもある。空間展示のみとする。

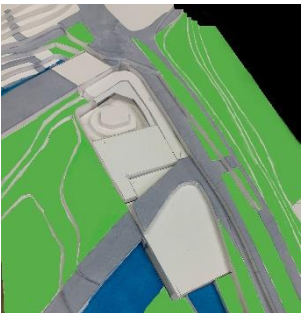


図 4.記念館の全体模型

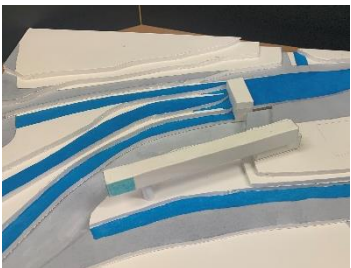


図 5.別館の全体模型

II.資料展示部門と空間展示部門

記念館の資料展示

- ①山田堰の歴史
- ②山田堰の機能

③合同堰とかんがい事業

以上3つを時系列に沿って展示する。また、当時の筏を再現して展示する。

記念館の空間展示

取水口跡は庭化して見学する。山田堰取水口があった4か所には暗がりのミゾで当手を想像させる。舟入川は川の行き先を半屋外空間から筏の再現展示と共に望む。そこから山田堰跡に出て、当時の目線の高さで見る。



図 6. 記念館の平面図

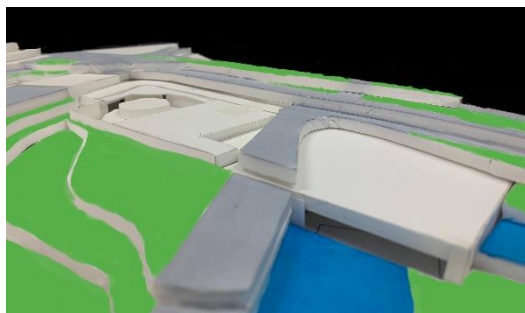


図 7. 記念館の模型

別館の空間展示

宙に浮いた暗い廊下の先にガラス張りの空間があり、そこから水路が3股に分かれ、広がる田畑に伸びていく様を見る。変化したもの(井)と変化していないもの(田畑)を同時に見ることになる。



図 8. 別館の平面図

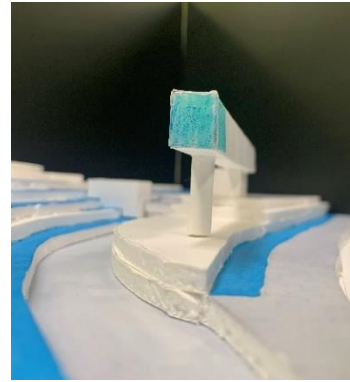


図 9. 別館の模型

Ⅲ. 井と共にめぐる場

記念館で山田堰跡を見てから、舟によって上井川を下って別館に行き、舟入川のそばを歩いて上流に戻っていく。

上井川では実際に舟に乗って下ることで、舟運として使われていたころの筏の疑似体験と同時に地形を実感する。

舟入川では途中で用水路の水門とベンチがあり、南に広がる田畑とそこに向かっていく水路を見る。壁面緑化や道路のストレートプリントにより左手に立ち並ぶ工場の殺風景の緩和と歩きやすさの向上を図る。



図 10. 舟入川そばの道路

5. まとめ

山田堰において重要である2つの場所と井について、体験を伴うことで実感して学べるような施設を設計した。重要な土木施設である山田堰について知る建築を設計できたのではないのだろうか。

6. 参考文献

- 1) 地理院地図/GIS Maps, 国土地理院
<https://maps.gsi.go.jp/>, (accessed 2023.02.08)
- 2) 山田堰 物部川水利史, 山田堰記録保存委員会, 昭和 59 年 3 月